

大兵庫における伝統の展開

－兵庫県近代和風建築総合調査4－

はじめに 奈良文化財研究所では、2011～2013年度に兵庫県からの受託事業として、兵庫県内に所在する近代和風建築の調査をおこなった。詳細調査の対象物件は計119件におよび、その報告として『兵庫県の近代和風建築』（兵庫県教育委員会2014）をまとめた。その成果の一部については、すでに『紀要2012』・『紀要2013』でも報告してきた。本稿においては、調査でみてきた兵庫県における多様な近代和風建築のあり方の中でも、もっとも伝統的な色彩の濃い民家に着目する。

大兵庫県の成立 現在の兵庫県の面積は、近畿地方でもっとも広く、旧国でいえば、播磨・但馬・淡路のほぼ全域、摂津・丹波の一部の5ヵ国にまたがる。この広大な県域をもついわゆる「大兵庫県」が成立したのは、明治4年（1871）の廃藩置県とその後の府県統合を経た明治9年であった¹⁾。以下では摂津・丹波、播磨、但馬、淡路の各地域ごとに、民家の特徴をみていこう。

摂津・丹波の民家 両地域には近世以前の民家として、摂丹型と呼ばれる妻入で奥行の深い間取りをもつ民家が分布することがよく知られている。三田市に位置する岡村酒造場の主屋（図I-80）は、幕末・安政2年（1855）に建設された妻入の農家であり、その1つといえる。

詳細調査では、明治以降の妻入農家は対象とならなかったが、奥行の深い平面をもつ農家に、尼崎市の小西家住宅（明治44年）などがあり、継承と変化の両面を見出すことができる。

当地域には妻入の町家も多く、丹波では座敷中門造と

よばれる平面形式をもつ妻入町家が近世中期頃よりみられる²⁾。丹波市に位置する西山酒造場の主屋（明治24年）はこの形式を踏襲する。一方、その床の間に注目すると、床板に春慶塗のケヤキを用いるなど、銘木の使用が目に残る。平面形式に伝統を、床の間の用材に新たな展開をみせる事例である。

播磨の民家 播磨地方には良質な民家が多く、またそれらが町並みとして残る地域も多い。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている地区こそないが、保存対策調査がおこなわれたものでも、たつの市龍野、赤穂市室津、赤穂市坂越、佐用町平福、高砂市高砂がある。

本稿では2つの港町の町家に着目したい。赤穂市坂越の山二家住宅（明治6年）と、相生市相生の濱本家住宅（明治7年、図I-81）である。ともに、2階建、本瓦葺、平入の建物で、2列の室構成を基本とする。なかでも特徴的なのが、表側のミセノマと奥の座敷（ミセオク・ザシキ）との間に幅が半間あるいは1間と狭い部屋を設けることである。西播地域沿岸部における特徴の1つと認めてよいだろう。また両者とも床の間周辺には銘木を多用しており、時代性が看取できる。特に濱本家住宅は2階の部屋が充実しており、南面は幅半間の縁を挟んで相生港を望む座敷が並び、床の間、天井、欄間と銘木が惜しみなく使われている。明治初期における廻船業の活況ぶりを背景にした展開である。

但馬の民家 近代の但馬地域の民家において、重要な位置を占めるものとして、南但地域、特に、現在の養父市域を中心とする3階建養蚕農家をあげることができる³⁾。1階の部屋構成は、近世以来の整形四間取りを基本としながら、養蚕に対応する空間を確保するために、



図I-80 摂丹型の農家（岡村酒造場）



図I-81 播磨の港町の町家（濱本家住宅）

3階を設け、抜気や掃き出し窓など養蚕をおこなう上での利便性の向上を目指した施設を備える。明治初期に建てられた中尾家住宅（図I-82）はその例の1つである。当住宅にみられるように、本卯建や、特徴的な意匠的な窓など、利便性のみでは語ることができない要素も同時に発展していることは興味深い。

また但馬では、北但地域に共通した意匠が見出せる。豊岡市の植坂家住宅（大正初期）、香美町の岡田家住宅（大正期。豊岡市竹野から移築）の軒桁を支える腕木は、海老虹梁状のものと、直状の2種類の形態のものを交互に設け、ともに先端に拳鼻を設けている。これと同様の意匠は鳥取県倉吉市打吹玉川の江戸末期から昭和初期の町家にもみられる。山陰地方における民家の意匠の展開を考える上で大変興味深い⁴⁾。

淡路の民家 淡路地域では、農家が詳細調査の対象にあげられた。多くの物件に共通する要素として、主体部の周囲に瓦葺の下屋を廻らす形式（四方蓋造と呼ばれる）がある。淡路市の林家住宅（昭和17年、図I-83）はその典型である。近世における淡路の農家については、報告例が少なく、全容があきらかにならないが、この形式は徳島県の近世民家に見出すことができる⁵⁾。ともに整形四間取りの室構成を基本とし、下屋部分に縁をめぐる形式をもつ。

おわりに 「大兵庫県」という呼称は、明治初期における制度の変遷を位置付けるなかで生まれた学術用語にすぎない。しかし、多様な伝統文化をもつ地域を包含した全国でもまれな自治体の特徴をあらわす語として、非常にしっくりくる。本稿でみたように民家の形式をみても、各地域の形式は県内よりもむしろ県外他地域との共

通性が際立っている。その展開の仕方は、銘木の多用、数寄の要素の摂取、養蚕への対応など、限定的なものが多い。

これらの建築は、近世からの地域の伝統が近代に入っても、連綿と続くことを示すものが多い。新たな建築類型が登場した公共建築や、数寄の文化が花開いた邸宅など狭義の「近代和風建築」と一線を画するこれらの建築群は、「近世民家」調査の枠組みからも溢れ、ややもすれば、見過ごされてしまいがちである。しかしこれらの建築も紛れもない兵庫の近代を背景にもつものであり、その存在は地域に根ざした文化として、兵庫県の近代に彩りを与えている。次の世代へと伝えてゆく必要性を感じさせるものであると同時に、地域性から乖離しがちな現代の建築を考える上でも重要な建築群といえよう。

（鈴木智大）

註

- 1) 兵庫県自体は、それ以前から存在していたが、その県域は摂津国の西半にとどまるもので、これと比較し「大兵庫県」と呼ばれる。例えば、『兵庫県の歴史』（山川出版社2004）などで用いられる。
- 2) 町家の形式については、大場修『近世近代町家建築史論』（中央公論美術出版2004）などを参照した。
- 3) 養父市の養蚕農家については、『養父市3階建養蚕農家外観分布調査報告書—養父市3階建養蚕農家調査1—』（兵庫県養父市文化財保護調査報告書第3集、養父市教育委員会2009）を参照した。
- 4) 倉吉市打吹玉川の町家にみられる腕木の意匠については、『倉吉市打吹玉川伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書』（倉吉市教育委員会2009）などを参照した。
- 5) 徳島県の近世民家については、『阿波の民家 徳島県民家緊急調査研究報告』（徳島県教育委員会1976）を参照した。



図I-82 但馬の3階建養蚕農家（中尾家住宅）



図I-83 淡路の瓦葺の農家（林家住宅）